

西会津町の歴史　－概説編－

1. 位置及び交通的地勢

本町は昭和 29 年(1954)、野沢町・尾野本村・登世島村・睦合村・下谷村・群岡村・上野尻村・宝坂村・新郷村・奥川村 1 町 9 ヶ村が合併し誕生した。福島県と新潟県との県境に位置し、西と南は越後山地、北は飯豊山、東は会津盆地との間の小山地に囲まれた山間地である。町のほとんどが起伏に富む山間地で、平坦地は会津盆地方面から日本海に注ぎ込む阿賀川流域とこれに流れ込む支流域にわずかに発達する河岸段丘と小盆地である。

古くから越と陸奥を結ぶ道筋にあたり、藩政時代には新潟県新発田市と福島県会津若松市間を通して、さらに奥州街道につながる越後街道が横断していた。現在は磐越自動車道・国道 49 号線・JR 磐越西線がほぼ同じルートで日本海と太平洋とをつないでいる。新潟平野と会津盆地の中間地点は山間地で交通上の難所であり、途中大きな町がほとんどないことから本町は人的・物的等補給基地として重要な位置にある。

2. 大地の誕生

およそ 2 億年前の中生代ジュラ紀の日本列島は、まだユーラシア大陸の東縁の海溝で大陸から流れ込む砂や泥などが堆積していた。より深海の海洋プレート(地球は厚さ 100km 程のプレートと呼ばれる 10 数枚の岩盤で覆われていて、1 年に数 cm 位の速さで水平に移動している)上には放散虫などの遺骸が大量に堆積し、層状のチャート(放散虫などの遺骸に含まれる二酸化ケイ素からなる硬い岩石)となった。やがて海洋プレートが陸プレートの下に潜り込むと海洋プレート上のチャートなどの堆積物ははぎとられ、海溝付近の砂泥層と混じって大陸側に付け加わり、白亜紀(1 億 3500 万年前～6500 万年前)に隆起して大陸東縁の陸地となった。白亜紀後期には花崗岩類の貫入が極東アジア全域に起こった。会津盆地と西会津周辺の最も古い地層(奥川のマンガン鉱)はこの時期に形成されたもので日本列島はまだ海中である。

2500 万年～1500 万年前頃の新第三紀中新世前期になると大陸東縁に断裂が生じ、東側のブロックが東方に移動して日本列島の土台石ができた。この海中の土台石の上に堆積物が堆積するとともに土台石の西側に沿って大規模な海底火山活動が起こり、緑色凝

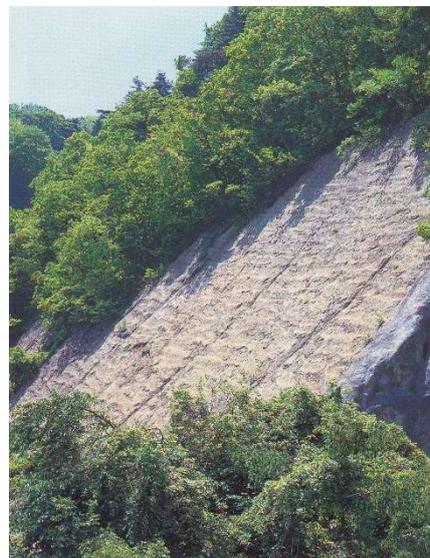
灰岩(グリーンタフ)と呼ばれる地層ができた。この緑色凝灰岩は本町にも広く存在し、「若草石」の名称で採掘され、安価で加工しやすい建築資材(塀・石垣・蔵・墓石など)として重宝がられた。この頃、海上に頭を出していたのは会津では下郷町以南の地域と飯豊山や帝釈山などと思われる。この火山活動とその後に入入する流紋岩類(赤羽根山・飯谷山周辺)には金・銀・銅・鉛・亜鉛などの金属類が含まれており、本町南部の鉱山を生み出す基となった。また、宝川のオパールもこの時期の地層に産出する。

やがて、日本列島は次第に隆起し始め、新第三紀中新世後期(800 万年±200 万年前)になると会津地域の海域はせばまり、海域は西会津・柳津付近と只見・昭和付近のみとなった。この頃、当時の浅い海底にできた波の跡が軽沢の「漣痕」であるが、残念なことに砂層の剥落が激しい。

その後も海退は進むが、およそ 500 万年位前の会津地域は沈降域で淡水の湖・沼・湿地の状況であったが、阿賀町にはまだ海域が広がっていた。

100 万年前位には広域な地盤運動が起こって隆起する場所と沈降する場所が明確になり、山地部と平野・盆地部ができ始めた。その頃の会津盆地は西会津まで広がっていたが、しだいに陸地が隆起する造山運動が始まり、会津盆地と西会津は分断される。野沢盆地は小規模であるが造盆地運動が続いており、現在の盆地の原形になったが、地域全体としては隆起運動が進んでいた。本町で野沢盆地を除いて最も新しい堆積物が分布しているのは阿賀川右岸の新郷地区である。そのため固結が弱く、地すべりなどが起きやすくなっているが土壌は肥沃である。

野沢盆地を中心とした阿賀川流域では側方浸食と堆積が繰り返され 5 つの河岸段丘ができた。4 つ位の段丘ができていた約 5000 年前、金山町の沼沢火山が大爆発を起こし、大量の軽石を火砕流として噴出した。一部は山地を越え津川まで流下しているが、大半は只見川・阿賀川を水流とともに流下し、いくつかの峡谷部で堰き止めが起こる。そのたびに広範囲に厚く堆積しながら野沢盆地に達するが、銚子ノ口で堰き止めが起こり、高い所にあった 2 つの段丘(高位段丘Ⅰ・Ⅱ)を除いて軽石質堆積物に広く厚く埋め尽くされた。この面が最も広い段丘面(中位段丘)で、この段丘上にあるのが野沢・萱本・森野・松尾・上小島などであり、一段低い段丘(低位段丘Ⅰ)上にあるのが野尻・下小島などである。新郷



軽沢の漣痕化石

の笹川流域には樟山付近まで軽石質堆積物が逆流した堆積層が見られる。奥川流域は阿賀川とは水面の高さが違うためこの影響は見られず、小規模な段丘ができています。野沢盆地は軽石質堆積物が厚く堆積しているため細粒の土質で、砂礫がないので耕運がしやすい。しかし、水の便が悪いため近年まで荒地だった所も多い。

3. 日本文化の中心的存在だった時代(旧石器・縄文時代)

西会津町で確認されている最も古い遺跡は上小島の「山本遺跡」である。高郷の塩坪遺跡と同年代の1万3000年前頃の旧石器時代の遺跡で、ナイフ形石器・彫刻刀形石器・打面再生剥離片・石刃などが出土している。本町では現在、旧石器時代の遺跡は他にみつかっていない。

縄文時代に入ると本町で最も古い遺跡は早期の塩喰岩陰遺跡(現在は高速道路下に埋積)で、次いで前期の六郎次遺跡(中野川支流の六郎次川左岸)である。多いのは中期から後期にかけての遺跡である。西会津(阿賀川・只見川流域)は、東



山本遺跡出土石器（石刃）

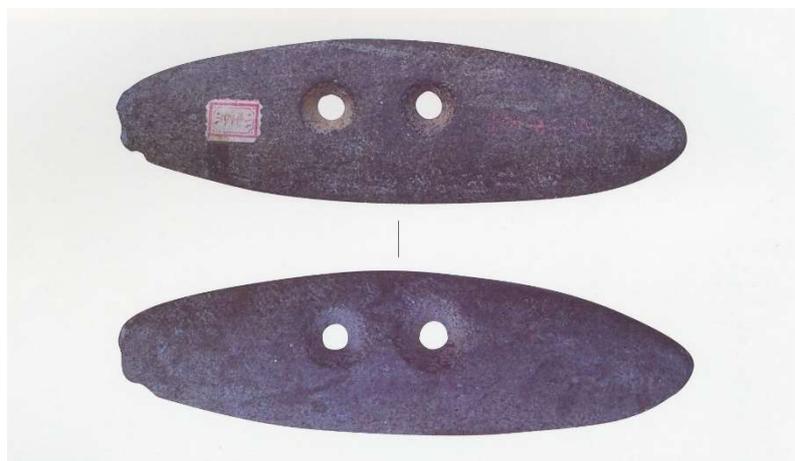


芝草・小屋田遺跡出土縄文土器（撮影：小川忠博氏）

北・北陸・関東の文化が混じり合っている地域で独特の文化の発達があった。中でも小屋田遺跡・上小島遺跡から出土した王冠型土器と火炎土器は「会津タイプ」といわれ、信濃川流域の火焰型土器文化との交流が色濃くみられる。火炎土器の鶏頭冠把手の発生から、確立までの横S字状文の変化が確認できる土器が多数出土していることは注目しなければならない。縄文中期の火炎土器文化は縄文時代から弥生時代までの中で最も創造性と多様性が見られ、今でも我々に多くの影響を与えている。この時代の日本の文化の中心地域が信濃川・阿賀川・只見川流域であることを考えると、本町の人々は日本の最先端の文化を担っていたのである。

4. 沢田に生き仏教に救われた時代(弥生・奈良・平安時代)

弥生時代の遺跡数は少ないが、上野尻遺跡で遺構・遺物(中空土偶)が確認されており、堀越の小中奈遺跡では石包丁が出土していることから稲作が行われていたことが推測される。本町には古墳と考えられるようなものは見られない。これは古墳を作るような力を持った者がいなかったことを表していると考えられる。河岸段丘の平地が水田として開かれたのはそれほど古い時代のことではなく、現在の状況に近づいたのは江戸時代に入ってからのことと考えられる。野沢にしても上野尻にしても上流の川や沼地から延々と用水堰を作り、水を引いたのである。それだけ水利が悪かったので、当時、水田として活用できたのは背後の山地から流れ出る小川のある場所に限られていた。俗にいう沢田であろうか。奈良時代・平安時代も同様であり、遺跡も水の得やすいような傾斜



上野尻遺跡出土中空土偶（左）と小中奈遺跡出土石包丁（右）

地などに見られる。このようにあまり米作りには適していなかったと思われる本町であるが、人々はそれでも力強く生きていたのだろう。

平安初期に会津に仏教を布教し、最澄と宗教上の論争を闘わせた徳一大師が創建したと伝えられている会津五寺に本町の如法寺と勝善寺の2つが入っている。これは本町が越国と陸奥国の境に位置していることと関係があるのではないだろうか。徳一大師の仏教布教にとって越国との出入口であるこの地を2つのお寺で守っていたとも考えられる。人々は徳一大師の法相宗を深く信心して日々の生活を送っていたのであろう。

5. 地頭の領地経営の時代(鎌倉・南北朝・室町・戦国時代)

鎌倉時代になると奥州合戦で手柄のあった佐原十郎義連に会津の地が所領として与えられたという。しかし、実際は宝治元年(1247)の北条氏と三浦氏一族との間の宝治合戦以後、北条氏に味方した佐原氏が北条氏の地頭代として会津に入ったのが佐原氏の会津支配の始まりである。義連の孫の代になって孫6人がそれぞれに会津盆地内を分割支配するようになった。経連(長男)猪苗代氏・広盛(次男)北田氏・盛義(3男)金上(藤倉)氏・光盛(4男)芦名氏・盛時(5男)加納氏・時連(6男)新宮氏である。

野沢・群岡・尾野本は芦名氏の支配下に、奥川・新郷は新宮氏の支配下にほぼ入ったものと思われる。やがてこの6人の兄弟の子孫が会津の覇権をめぐる争いになり、最終的には新宮氏と芦名氏の決戦となって芦名氏が会津の覇者となる。西会津町域の鎌倉・南北朝時代の領主に関する直接的な根本史料は伝えられておらず記録と伝承があるのみであるが、それをもとに芦名氏の完全支配に至るまでの西会津町域を分割支配していた領主(地頭層)を『西会津町史 別巻3』により記す。領主名がはっきりしている場合は領主名を、不明の場合は館名で、【 】には推定される上位領主名を記すことにする。

(1)野沢地区

- ・野沢原町村の荒井氏 正安(1299~1302)の頃、野沢原町村に館(荒井館あるいは横町館)を築いていた荒井信濃守頼任は、嘉元元年(1303)、徳蔵和尚の寺があった地に諏訪社のお宮を建てたという。また正慶元年(1332=元弘2)、如法寺を建て替えたともいう。戦国時代の天正9年(1581)、荒井万五郎が芦名盛隆の名代として織田信長のもとに遣わされる。伝承史料であるが『芦名家分限録』に「葦名家一家衆野沢

荒井伊賀守」とあり、越後国境に近い野沢の地は鎌倉時代後期以来、芦名氏にとって重要な場所であったのであろう。現在、熊野神社がある鹿島館跡は東～北側が段丘崖と3本の豎堀に守られているというが、豎堀は平滑な浸食谷であり、南～西側は常楽寺がある街域より一段低く防御上疑問が残る。芦名盛氏の重臣であった野沢の館主荒井^{うまのじょうしげのぶ}右馬允重信は、主命により安達郡入間の城主として仙道の目付役を務めていたが、老齡により嫡男新兵衛政頼に家督を譲り、野沢に帰って野沢東館に隠居し天正10年(1582)に没したという。この東館が鹿島館であれば隠居所なので防御のことはあまり考えなくてもよいのではないだろうか。



ちなみに大槻太郎左衛門の乱は天正6年(1578)であり、太郎左衛門の後には入らなかったのではと思われる。【芦名】

- ・野沢村の菅原氏 永仁2年(1294)、芦名盛宗が信州から黒川(今の会津若松)に諏訪大明神を勧請すると、通過した村々の中で野沢村の菅原刑部大輔頼国、宝川村の小原氏らが延慶3年(1310)、諏訪明神を祀っているので地頭であったのか。原町村には荒井氏がいるので菅原氏は野沢本町村の地頭かと思われる。【芦名】
- ・西平の小平(石川)氏 建武3年(1336=延元元)、現石川郡平田村を領していた石川氏の一族の小平七郎三郎光俊が足利尊氏に属して戦功をあげ、野沢村の半分を預けられたという。如法寺東側の段丘突端に羽黒山館を築いて石川氏一族が住んだというがはっきりしたことは分からない。
- ・堀越館 堀越村の西の尾根状の所に作られた館跡であるが、住人・年代とも不詳。
- ・芹沼村の矢部氏・武藤氏 矢部十郎頼輝が芹沼館(柵)を築いて住む。天正(1573～1592)の頃、武藤中務允政国(恵政園)が住む。【芦名】

(2)尾野本地区

- ・松尾村の宇多川氏 康安2年(1362=正平17)、松尾村の領主とみられる宇多川道忠は、真福寺に地蔵菩薩像を奉納した。宇多川氏は真福寺第6代有伝和尚の時に鎌倉に帰ったというが、詳細は不明である。館は現在、菅原神社がある段丘上で宇多川(河)

館という。子孫の長谷川内記直がこの館に住み、6代内記義一の時、天正17年(1589)に伊達政宗が会津に侵攻し、この館も落ち宇多川氏は散り散りとなる。義一は天正18年(1590)、野に下り、後の子孫が野沢組の郷頭になる。【芦名】

- ・ 縄沢村の二瓶氏 応長元年(1311)、二瓶安房綱盛が願主となって広谷寺を開基したというので、縄沢村の領主であったかと考えられる。
- ・ 縄沢村の青津(生江)氏 天正の初めの頃(1573～)、東青津村から生江浩春という者が主従18人でやって来て新たに開墾した。後に生江を青津に改めた。村の長である。【芦名】
- ・ 縄沢村の金白氏・大竹氏 『新編会津風土記』では金城館とって天文中(1532～1555)に金白加賀守景良という者が住んだとある。『会津鑑』『会津封内城壘館柵全』『会津古壘記』には大竹与市景次が住んだとあり判然としないが、居館は不動川と長谷川に囲まれた段丘上にあり山城部が一ノ沢山山頂部にある。また、不動川と長谷川が合流する部分に向けて山脚が伸びており、その山脚の尾根の部分に向館という見張り場的館跡がある。芦名盛氏の命で、大槻太郎左衛門の動静を探るため金白景良が築いた館と言われている。この館からは越後街道も西方に通じる街道も一望できる。【芦名】
- ・ 小杉山村の田崎氏・目黒氏 貞和2年(1346＝興国7)、出ヶ原村は沼沢村丸山城主沼沢出雲守山内政家の領地で、政家は代官田崎隼人を遣わして沼沢から円満寺を出ヶ原(伊豆原)村に移し、以前からあった観音堂に宝器を奉納し併せて観音堂を修復したという。田崎氏は小杉山に館を構え、これを小杉山館という。小杉山は只見川左岸域への街道筋にあたる。後に目黒佐渡某という者が住んだというが詳しいことは不明である。【山内】
- ・ 上小島村の成田氏 本町では大きい部類に入る館跡で、南北300m、東西200m。西は松尾川、東は細田川に挟まれているが南の防御が弱い。永禄2年(1559)、芦名盛氏の家臣となり小島村を与えられ、永禄10年(1567)、成田右馬ノ介氏胤が館を築いて居住した(『会津鑑』『会津古壘記』『野沢郷每村委記録』)。成田氏は武州忍城(埼玉県行田市)の城主の一族であるという。『新編会津風土記』では天正の頃、成田左京亮常定が住むとあるが、「成田家系図」によれば、成田氏胤の子に成田常定が見える。天正6年(1578)、大槻太郎左衛門に組して敗れ、常定の子右京進某という者が大下野尻に下り、眼医者となる。【芦名】

- ・上牛尾村の鈴木氏 上牛尾集落の南東、通称内野山と呼ばれる山地の西側に張り出した丘陵地上に小規模な山城があり牛尾館という。時代は不詳だが鈴木太郎左衛門某という者が住んだという。【山内】
- ・牛尾村雲在家の橋谷田氏 雲在家館といい年代は不詳だが、橋谷田七郎太夫某(太輔勝光)が住んだという。【山内】
- ・山口村の鈴木氏 山口集落の南の尾根上にある館で、山口館という。時代は不詳で鈴木伊豫某という者が住んでいたという。【山内】
- ・黒沢村の長谷川氏 黒沢集落の南、蝦夷神社の南西の小丘上にあり黒沢館という。時代不詳。不長谷川主殿某という者が住んでいたという。【山内】
- ・萱本樋ノ口の渡部氏 樋ノ口の西にあって樋ノ口館という。天正の頃(1573~1592)渡部中務某が住んだという。【芦名】
- ・出ヶ原村の田島氏・目黒氏 時代は不詳だが田島加賀・目黒佐渡という者が柵(出ヶ原柵)を築いていたという。【山内】
- ・尾登村の斎藤氏 永享5年(1433)、斎藤丹後守義頭が柵(尾登柵)を築く。天正年中(1573~1592)7代孫の新介が萱本村に移る。【芦名】
- ・軽沢村の近藤氏 時代は不詳だが軽沢の北、山中にあったが山崩れて館跡はない。近藤美濃某という者が住んでいたという。

(3)群岡地区

- ・下野尻村端村の小山氏 端村の南西、西部の山地から延びる小尾根上にあり群岡小山館という。時代は不詳だが、小山宮内小輔政能が住んだという。【芦名】
- ・下野尻村の佐原氏 下野尻集会所の北に位置し、周囲を堀に囲まれていたと思われる平場の館で外城(安井)館と呼ばれる。時代は不詳だが、佐原与一重定が住んだという。【芦名】
- ・上野尻村の薄氏 舌状に解析された段丘の先端にあり小規模で大崎館という。時代は不詳であるが、薄石見守頼包が築くという。【芦名】
- ・白坂村の佐藤氏 延慶2年(1309)、佐藤継信7代の孫、左馬介忠則が出羽国庄内から来て川谷山の麓に熊野三社権現の祠を祀り、川谷柵を作ったとの伝えがある。6代左京介通俊が応永28年(1421)、山伏になるという。
- ・宝川村の清田氏・小原氏 時代は不詳だが、宝川柵を清田宮内少輔が築き、後に小原帯刀信高が住んだという。【芦名】

- ・白坂村の薄氏 時代は不詳だが薄刑部允保盛が白坂村柵を作り住んだという。

(4)新郷地区

- ・城越山館 滑沢集落と正源寺の中間点の尾根にある。『新編会津風土記』によると昔、中野三十坊といってこの山麓に大きな寺院があり佐原義連と戦い立て籠もった所という。とすると時代は鎌倉時代ということになるが不詳。
- ・高目(館野山)館 高目集落の南の館野山にあり、天正 17 年(1589)に伊達政宗が会津に侵攻した際、金上氏の残存勢力である津川の金上盛実に対する備えとして臨時に作ったものと思われる。守将は後藤孫兵衛。【伊達】
- ・八重窪集落の武藤氏 八重窪集落の西の山裾にあり、山城部と居館部からなる。『新編会津風土記』によると時代は不詳だが芦名氏の家臣の武藤摂津守がこの地を開き住んでいた所という。また、端村の上島に武藤中務丞の居館があったがその地は阿賀川の氾濫でなくなったのか名前だけが残っているという。2 人の関係は分からないが同族であったと考えられる。【芦名】
- ・橋屋村の広瀬氏 永徳 2 年(1382)、領主広瀬民部入道が徳正寺を建立したといい橋屋村の地頭であったかと思われる。

(5)奥川地区

- ・^{うわだ}上田館 梨平集落の北西の尾根上にあり、物見的なものと考えられる。文献にも伝承にもない。
- ・丸山館 中町集落の東南の丘状の場所にあり、文献等にはない。
- ・反田山館 真ヶ沢集落の南、龍泉寺の東の尾根上にある。『会津鑑』は矢部土佐勝光が龍泉寺の本願村主で石田館に住んだとある。『会津古壘記』では、矢部土佐勝道が住んで石田館と言ったとある。『矢部氏系譜』によると奥川に反田源左衛門、柳沢斎藤、田中越中という 3 人の賊徒がいて領民を苦しめていたので、宝徳元年(1449)、芦名家の命により三賊を退治したとある。元々の反田館の主は反田源左衛門ということになる。【新宮】
- ・柳沢館 小山集落の南西、奥川の氾濫原にある。柳沢斎藤の居館である。【新宮】
- ・斎藤林館 柳沢館の北西、奥川右岸の尾根にある山城である。柳沢館の詰め城と考えられる。【新宮】

- ・奥川小山館 小山集落の北、奥川右岸の小山状の場所にある。「とみのやかた」の伝承がある。
- ・越中林館 奥川小山館の北、宮野と松峯・中ノ沢を結ぶ道路を見下ろす尾根上にある。奥川小山館の詰め城と考えられ田中越中の城と思われる。【新宮】
- ・大舟沢館 大舟沢集落と宮古集落を地図上一直線に結ぶ中間点で、沓掛峠道を見下ろす位置にある山城。『新編会津風土記』『会津鑑』『会津古壘記』では時代は不詳だが、矢部宮内が住んでいたという。矢部氏の東方への防御城。【芦名】
- ・三境館 大舟沢館の南で沓掛峠道を挟む位置の物見的なもの。現在は馬頭観音を祀るお宮がある。【芦名】
- ・八森山館 向原集落井岡の北にある小規模な山城。『会津鑑』『会津古壘記』には大沢兵庫が住んでいたという。
- ・杣根沢館 もくねざわ 新町集落の南、道目集落の東の尾根上にある。『会津鑑』『会津古壘記』には柵として武藤与七政景が住んだとあるが場所が不明。
- ・権現山館 中ノ沢集落の北、高山と呼ばれる尾根にある山城で奥川の宮野集落以南の主な集落を一望でき、また、奥川小山館・越中林館から中ノ沢集落を経て越後に通じる道を抑える位置でもある。『旧事雑考』『新宮雑葉記』には、新宮氏と芦名氏との戦いで応永 27 年(1420)、新宮氏の本城である新宮城(高館城)が落ち、新宮盛俊は奥川の城に籠るがこれも落ち五十公野に逃げるとある。権現山館は新宮荘域に入る奥川筋において最大で、新宮盛俊が籠った奥川の城の可能性が高い。【新宮】

永享 5 年(1433)、再起した新宮氏は反撃に出るが、攻略に失敗し滅亡する。矢部土佐勝光は芦名盛高に仕え、命を受け、宝徳元年(1449)、奥川の反田源左衛門、柳沢斎藤、田中越中を滅ぼし奥川の真ヶ沢に住む。これにより越後に通じる奥川と新郷の支配が新宮氏から芦名氏に変わり、西会津町の全域が芦名氏の支配下に入る。そして、短期間であるが会津の支配者は芦名氏を滅ぼした伊達氏に変わる。その後、蒲生氏郷が入封するが氏郷の治世は天正 18 年(1590)～文禄 4 年(1595)の 6 年間で、2 代秀行が慶長 3 年(1598)



芦名・新宮・山内各氏の勢力範囲図

に宇都宮に移封となる。その後上杉景勝が入るが、上杉牽制の手柄により秀行は慶長6年(1601)会津に再封となる。

6. 江戸幕府の統治・支配体制確立の時代(江戸時代)

蒲生氏の時代は秀行から忠郷の寛永4年(1627)まで、次いで加藤嘉明・明成の寛永20年(1643)までで共に家臣を治めきれず短期間で終焉を迎える。寛永20年(1643)保科正之が山形から入封し、以後代々慶応3年(1867)までの224年間会津の領主として会津の文化・経済・社会制度を確固たるものにし、現在まで続く各地の風土形成に大きな影響を与えた。

(1)組と百姓の階級制(村役人)

会津領内を石高1万石で1つの単位にして「組」を作り統治した。西会津町は野沢組(野沢原町・野沢本町・山口・牛尾・出ヶ原・黒沢・小杉山・長桜・二栗・泥浮山・程窪・青坂・小島・松尾・茅本・森野・縄沢・尾登・芝草・芹沼・上野尻・下野尻・徳沢・堀越・牧・安座・中野・片門他)、吉田組(吉田新田・井岡・向原・杉山・下町・道目・新町・中町・塩・山浦・出戸・中ノ沢・極入・小屋・梨平・宮野・小山・真ヶ沢・小綱木・大舟沢・原・平明・新村・樟山・滑沢・滝坂・柴崎・橋立)、大谷組(高目・漆窪・井谷・戸中・橋屋・八重窪他)、海道組(白坂・宝川他)の4つの組にかかっていた。さらに組の中をいくつかに分けている。例えば野沢組では上組・中組・下組の3つに細分化している。組の上に郡を置いてさらにまとめた。

会津藩はこれらの組に村役人(地下役人)を百姓の中から組織して統治した。各組に1人の郷頭(組のトップ)を置き、その下の各村々に肝煎(村のトップ)を、その肝煎の下にじがしら地首・おとなびやくしょう老百姓・くわがしら鋤頭(寛政の改革以後は5人組のリーダーとして新設)・小走・山守・堰守・お蔵番などがいた。宿場では宿役人として検断(宿場の最高責任者で身分の高い人に対応)・問屋(荷物の中身・重さのチェックや通信事務)・馬差(人馬の手配)などに分かれていた。また百姓に階級制ができており、自活できない百姓には名子(本百姓に従属した者で住居・耕地などを借りて労役を提供した農民、村政には参加できない)・水呑(土地を持たず、持っていてもわずかで村政にも参加できない)などがいて、百姓内部に貧富の差が次第に出てきた。元禄13年(1700)の会津藩内の百姓の人口は、百姓134,692人、名子・水呑29,769人であった。弘化4年(1847)の野沢組の百姓

は、郷頭 1 人、検断 2 人、肝煎 43 人、地首 58 人、老百姓 143 人、小走 2 人、水呑 138 人であった。

(2)人々の生活

蒲生・上杉・再蒲生時代は田畑を上・中・下の 3 段階に区分し、収穫量の半分を年貢として徴収した。また、屋敷・麻畑・漆木・漁業にも税がかかった。加藤時代になると田畑の区分が 9 段階になり、さらに様々な物にも税が課せられ厳しい取り立てとなった。各地の農民は他領内へ逃げ込む者が数多く(2,000 人余)出てきた。保科時代は収穫量の 4 割が年貢となり豊作にも恵まれ、百姓にとって江戸時代最高の時となる。しかし、次第に増税され凶作なども重なり農民の生活は苦しくなるとともに、貧富の格差が広がり一揆なども起こるようになった。藩は養蚕・麻・漆・蠟・人参・たばこ等の栽培を奨励し、農民に現金収入を得させると共に専売制を設け、税収を上げようとした。

西会津町のどの村でも共通しているのは「名子・水呑」階級がいることである。例えば、最も農民が楽に暮らせたという寛文 10 年(1670)でも野沢原町村では、肝煎 2 人・本百姓 80 人・無役小百姓 10 人・水呑 31 人・名子 16 人となっている。芹沼村では肝煎 1 人・本百姓 1 人・名子 2 人という具合である。

当時の西会津町の状況を概括的に見てみると、宿場町近辺や街道筋では商人は商売をし、百姓は農業の傍ら馬での輸送(馬方)をした。宿場や街道筋から離れていたり、馬を持たない小百姓は山間地で耕地が狭いため林業・木炭製造・漆・蠟や冬季間和紙づくりなど一年中休む暇なく、何らかの仕事に従事し、収入を得なければならなかった。

① 野沢組

野沢・野尻は宿場町(駅所)的色彩が強く、野沢原町村が駅所になって現在の町型ができたのは元和 6 年(1620)頃で、野沢本町村は文化 3 年(1806)に駅所となってから両村が 1 つになって野沢宿ができ上がった。野沢原町村は街道を挟んで北分と南分に分かれ、それぞれに村を取り仕切る肝煎と通信事務を取り仕切る検断職がいたが兼務の時もあった。野沢本町村でも同様であったと思われる。野尻では上野尻宿が延宝 2 年(1674)に整備された。下野尻宿は町型の形態が古い形であることから野沢宿より新しく上野尻宿より古いと考えるのが妥当である。当初、阿賀川の川湊は大下野尻(端村)近くにあり、荷物の積みおろしが盛んであった頃には下野尻村の家数は上野尻村に勝っていたが、大水で湊が被害を被ると湊は次第に上流の上野尻村の方に移動し家数も逆転

するようになり、上野尻宿には検断職もおかれるようになった。文政12年(1829)、8代藩主容敬新発田領御境御巡見の時の通達記録には上野尻村肝煎兼務検断格、下野尻村肝煎御城御目見の記載が見られる。また、天保4年(1833)、下野尻村検断格の者を検断に任命してほしいと片門・野沢両駅の間屋が願い出たが、下野尻宿検断の実現はなかった。

周辺の百姓は農業の傍ら荷物の駄送を生活の糧としていた。野沢原町村・本町村では村内だけでは足りないで牛尾村・縄沢村が原町村の伝馬などの輸送を、本町村では萱本村・縄沢村が参加して駄送していた。宿場の規模が小さかった上野尻と下野尻、白坂と宝川はともに相駅(単独で運送業務ができないので2つの駅が月の半分ずつ分担する)であったが、それでも馬の数が足りなく荷物が滞りがちであった。馬を一頭持っている民間の荷物なら大変よい稼ぎになったが、公用の伝馬だとほとんどただ働きに等しかった。幕末に近づくにつれて伝馬は増え困窮することになる。その救済措置として、民間の荷物を運べるのも本来は伝馬をしている者にのみ認められていた。



宿場町としての規模は野沢宿が位置的に参勤交代の宿泊地であり、また、大山祇神社の門前町的色彩もあったこと、御蔵入に塩などの海産物を送る起点であったこと、地形的にも開けていて宿場の立地条件がよかったことなどから越後街道の宿場では3番目に大きく繁盛していた。上・下野尻宿は規模的には及ばなかったが舟運の重要な川湊(荷物の積み替え地)であり、対岸の柴崎に渡って陳ヶ峯・館原・小荒井に通じる「陳ヶ峯通り」と橋立から荻野・館原・小荒井に通じる「西海枝通り」の越後裏街道の3ルート中の2ルートの拠点としても繁栄した。

山間地の馬を持たない小百姓は先述したように林業・木炭製造・漆・蠟や冬季間の和紙づくりを行った。大障子・小障子・目録は出ヶ原村・牧村・堀越村・芹沼村・上野尻村などが作り、中判は縄沢村・程窪村・泥浮山村・長桜村・牛尾村・中野村などが作ったが、他の組でも盛んに作られていた。作られた和紙は会津藩御用達であり、藩外持ち出し禁止の品であった。紙の価格は野沢市場で決定し、生産者が勝手に販売することはできず、市場商人に任せられていたが、値段の高い方に密かに売ることもあった。

会津戦争では野尻周辺で戦闘があったが、豪商たちが新政府軍に資金を提供し狼藉のないようにしたため無傷であった。

② 吉田組

奥川は山間地で田畑は少ないが、古くから越後と会津を結ぶ道筋として繁栄してきた。津川から鹿瀬に出て阿賀川の右岸を通過して檜木峠を抜けて奥川に入り、小綱木から杳掛峠を下って館原・小荒井へと通じる越後裏街道の「奥川通り」があった。駅所ごとに荷物を積み替える運送ではなく、直通の運送をする「中追馬」というものが木曾・大谷・吉田組などの山間の生産性の低い村々の農民(原則は伝馬の仕事をする者)に特別に認められていた。直通であったため荷崩れもなく早くて安いので依頼荷が増え、駅所の問屋の収入減となり、問屋ともめたために禁止された時代もあった。喜多方(北方)地方の米価は若松・高田・坂下あたりの米価より2割くらい安かったため、馬方は津川から塩を喜多方まで運び、帰りに喜多方の米を津川へ運んで売って稼いだ。馬を持たない小百姓は背負って運ぶ「徒背負」^{かちせおい}で同様にした。奥川は宿場ではないが津川と喜多方の間点で宿場的色彩を持ち、休憩・補給地として栄えた。また、飯豊山登山裏口としても重要な地であった。

耕地は狭いが米作りの他に山に関する仕事(木材・木炭製造・漆・蠟など)や和紙づくりも盛んに行われた。弥平四郎の木地づくりや熊の毛皮なども忘れてはならない。また、会津藩の政治犯などの配流の地でもあり、貞享3年(1686)、保科正興^{まさおき}の流刑事件に連座して原甚右衛門は中ノ沢村に護送され、斬首となることを聖光院に助命され遠郷となる。山田作之丞(進)は中ノ沢村に配流となり、同所で殺害。苗村新六は極入村へ(下川儀太夫は安座村で殺害)配流となる。また、郡奉行安藤市兵衛有益は猪苗代鹿畑開拓の件で元禄元年(1688)から同5年(1692)まで、極入に給俸5口で配流となっている。

会津戦争では、西会津町域で最も激しい戦闘が真ヶ沢村の龍泉寺付近であった。

③ 大谷組

新しい時代の地質で軟らかいため地すべりなどでできた窪地が多く、また肥沃であるが山間地であるため耕地面積が狭く、米作りの他に林業や炭焼き・漆・蠟・和紙づくりなども盛んに行われた。西会津町域では木地挽が各所で行われていたものと思われ、弥

平四郎が有名であるが、文化5年(1808)、高目村でも行われていたようで「高目椀」として出荷していた。

2つの越後裏街道(陳ヶ峯通り・西海枝通り)が通っている。陳ヶ峯通りは古くから鳥井峠を通過して陸奥国と越国を結ぶ道筋であり、また、喜多方方面の年貢米を柴崎まで陸送する道でもあった。西海枝通りは上野尻から渡船して橋立に渡り戸中―橋屋―小ヶ峯―荻野―西海枝―大谷―小荒井となる道であるが、阿賀川の通船ができない区間の姥石・西海枝と小ヶ峯間で陸送したり、姥石・西海枝から橋立・柴崎まで陸送したりする道として重要であった。

吉田組や大谷組では観音信仰が盛んに行われたようである。会津盆地の観音巡りをするのは時間も経費もかかるので、藩の施策もあって代わりに村内の観音様を巡るという習慣ができ上がったものと思われる。

④ 海道組

白坂村・宝川村は寛永4年(1627)に野沢組から海道組に編成替えになった。宝川村は陸奥国と越国の国境で昔から重要な地であり、徳一大師開基と伝わる勝善寺がある。ともに山間狭小の地で、林業・木炭製造・漆・蠟・紙づくりなどが中心であったと思われる。白坂宿・宝川宿の整備は上野尻宿とほぼ同じ頃と考えてよいであろう。検断職はおらず、問屋(白井家)が運輸通信事務を取り仕切っていた。川谷村の佐藤家は会津の当山派修験道を取り仕切る立場にあり、鬼光頭川の男滝・女滝は修験道の修業の場であった。

西会津町の多くの村は山間地の耕地の狭い場所にあり、野沢・尾野本や野尻などの段丘地も水田用の用水は川の上流か、山中の沼などから延々と引かなければならず、現在のような状況になったのは江戸時代と考えられる。凶作の時は標高の高い村程大変な状況であったと思われる。

7. 人々の戦いと交通手段変革の時代(明治・大正時代)

会津戦争で会津藩が新政府軍に降伏すると、京都守護職などの費用を賄うため重税が課せられていた会津では一揆の火の手が上がった。明治元年(1868)11月28日、高久組・中荒井組で勃発した会津世直し(ヤーヤー)一揆は会津一円に広まった。野沢・吉

田・大谷組でも肝煎・豪商が襲われ、「水帳（検地帳）」焼却と肝煎の入れ替えを要求し、応じなければ家屋の打ちこわしに及んだ。肝煎が襲われたのは水帳の管理と実務上の年貢徴収者であったためである。肝煎への対応は様々で、無傷の所と柱をのこぎり引きされた所もあった。野沢組は新政府軍の進行ルートであったため、早期に終息した。

天明8年(1788)、経済的に繁栄していた野沢原町村の常楽寺に、藩の郡役所の命で子弟教育のための手習いより上級の四書五経などの学問を教える「野沢幼学校」ができた。幕末期には多くの私塾ができたが、中でも奥川吉田の宮城如山・三平親子の飯川館(高陽塾)と野沢原町の渡部思斎の研幾堂は、多くの知識人を輩出している。研幾堂の渡部鼎や野沢雞一・石川暎作・山口千代作・小島忠八などは著名である。

明治政府による西会津町の新しい行政区は明治6年1月に第三大区と第四大区に入った。明治22年には市町村制が施行され、大正10年には芹芝越村・正中村・野沢村が合併し野沢町ができ、他に登世島・尾野本・睦合・下谷・上野尻・群岡・宝坂・新郷・奥川の各村々があった。

明治15年、政府から3つの内命(自由党の撲滅、帝政党の援助、三方道路の開削)を受けた三島通庸が福島県令として赴任した。特に三方道路の開削を強行することにより、自由民権運動を弾圧しようとした。会津の15歳以上の男女は毎月1日ずつ2年間夫役に出ることを課せられ、出られない者は男15銭、女10銭のお金を納めること。これを3ヶ月前に遡って徴収し、わざと移動するだけでも数日かかるような所へ夫役を設定するなど徴発を繰り返した。これに対して、西会津町では山口千代作や小島忠八ら野沢周辺の肝煎・豪商階層が中心となって反対運動を展開したが、同17年に開通祝賀会が実施され反対運動は終焉を迎えた。現在、三方道路はそれぞれ重要な国道として発展している。

三方道路ができると輸送の方法が馬から馬車に変わり、人・物を大量に運ぶ馬車の需要は増えた。裏街道筋は難所が多く、山都への道の整備は進まなかったが、新郷地区は明治25年(1892)、喜多方―山都―山郷―小清水―平明―樟山―柴崎―(渡船)―上野尻の道が一等里道として道幅1間半~2間に整備された。このことによって今までの調査で空欄であった新郷地区の商業が14戸となり、経済活動が活発になった。

大正3年に岩越鉄道が全線開通すると、遠方への人・物・通信の流れが馬車から鉄道に一気に変わった。各村々の生産物は馬車で駅まで運ばれ、駅に集積された後に都市部に搬出されるようになったのである。野沢駅には甲石の若草石や黒沢方面の鉾石(現在

の西方街道の整備)・西方方面の木材などが馬車で運ばれ貨車で積み出された。駅の賑わいは昭和40年代のモータリゼーション到来まで続いた。

奥川地区は阿賀川を舟で渡って徳沢へ出ていたが、大正5年(1916)に吊り橋が架かって馬車が通れるようになり、徳沢駅から軌道が施設され奥川地区の林業は飛躍的に発展した。奥川―徳沢間のバスは、最初個人によって昭和6年(1931)に運行された。

新郷地区は昭和13年(1938)、柴崎橋が阿賀川に架かって徒歩で上野尻(駅)に出られるようになり、さらに昭和34年(1959)、上野尻発電所の堰堤が完成し県道になると野沢―平明間の乗合バスの路線が開通し利便性が拡大した。

このように時代とともに交通機関は進歩し、人・物の動きは活発になるが、山間地で耕地面積の狭い西会津の多くの村では米作りだけでは生計は立てられず、林業・木炭製造・養蚕業・葉タバコ栽培・和紙づくりなどの収入に頼らざるを得なかった。新郷で和紙づくりが盛んに行われたのは滑沢・滝坂・呼賀・樟山・柴崎・橋立・戸中・橋屋・井谷などで、西会津町で最後まで続いていた井谷の和紙づくりが昭和52年に幕を閉じた。奥川や新郷では「萱手」という茅葺屋根を作る出稼ぎが多かった。

8. 歴史的背景と地域区分

旧石器・縄文時代は自然環境と一体化した時代で食料の獲得という点では当地は大変好条件の地であった。弥生時代以降は稲作の成否が地域の発展に深く関わることになるが、西会津町の平坦地は河岸段丘で水利が悪く、稲作可能地は沢地と清水がある地くらいでほとんどが原野であった。

この河岸段丘の原野に水を引き水田地帯に変わるのは中世～江戸時代である。中世以降支配関係が明確になると徐々に地域間の色彩を感じられるようになる。中世では主に本町内を流れる阿賀川右岸域は新宮氏の支配域で、左岸域は芦名氏の支配域であったが最終的には芦名氏が全域を支配した。江戸時代になると西会津町の新宮氏の旧支配域は「吉田組」と「大谷組」になり、芦名氏の旧支配域は「野沢組」となった。

明治以降、各村々は合併し「区」から「村・町」へとまとまっていった。昭和29年、1町9ヶ村が合併して西会津町になり、野沢(野沢町)・尾野本(尾野本村・登世島村・睦合村・下谷村)・群岡(群岡村・上野尻村・宝坂村)・新郷(新郷村)・奥川(奥川村)の5つの行政区で活動を行っている。この5地区は西会津町として統一的まとまりを見

せながらも江戸時代の「組」としての経済・文化・行事・風習などの影響と考えられる名残が現在でもまだ見られるように感じる。